

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2857 号

Main causes of death in advanced biliary tract cancer

進行胆道癌の直接死因

瀬戸 花菜 (せと かな)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、切除不能胆道癌患者の直接死因と生存期間を後方視的に観察、解析したものである。

【新規性、創造性】 既報で胆道癌患者の直接死因について研究されたものは無く、直接死因は胆管炎、悪液質、肝不全であろうと臨床の経過から推測するに留められていた。それを科学的に検証すべく、初めて本研究で解析するに至った。

【方法・研究倫理】 2010年8月から2020年3月までに当院消化器内科を受診し、切除不能胆道癌と診断された108人の患者の診療録と検査データから直接死因を推定し、生存期間を解析した。腫瘍の増勢が起因となった死因、例えば肝不全、胆管炎、悪液質、転移による死因等を腫瘍増勢による死因とし、それ以外を合併症に伴う死因として大別した。胆道癌の主な死因と考えられる肝不全、胆管炎、悪液質を直接死因とする定義を、既報を参考にし定めた。また、死因毎に生存期間の解析も行った。

【学術的意義】 今まで推定されるに留められていた死因とその生存期間を評価することで、実際に胆道癌患者を診療するにおいて今後起きうる合併症や死因を推定し、なるべく予後を延長させるためには何を重要視すべきか推定することができる。

【考察・今後の発展】 本研究の結果から、進行胆道癌患者の予後は、肝外への腫瘍進展が主な死因である場合に短縮すると考えた。さらに、死因が肝不全であった患者の生存期間はBSC群では最も短かったが、化学療法群では比較的長かった。この結果から、胆道癌患者が死亡する際に肝不全が終末像と推定され、薬物治療で肝不全発症までの期間をなるべく延長することで予後の改善が期待できる可能性があると考えた。生存期間を短縮させる因子として注目すべき病変、病態がわかることで、薬物治療を進める際にどの病変に注目して治療を行っていくべきか、更なる研究で検討しうると考える。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。